



『medicina』Vol.58 No.4
2021 年増刊号

**救急診療
好手と悪手**

坂本 壮＝編集

定価：6,050 円
B5・318 頁／医学書院／2021
[ISSN 0025-7699]

実臨床で陥りやすい“悪手”を知り、“好手”を学べる 1 冊

評者 仲田和正 西伊豆健育会病院院長

本書の冒頭の「脳梗塞 mimics を見逃さない！」(p.14~18)を読んで、あまりの面白さに引き込まれ、一気にすべて読了してしまいました。通常、GCS (Glasgow Coma Scale) の E (開眼) と V (最良言語反応) は「E1V1」「E1V2」のように同じくらいの数値のはずであり、E が良いのに V がガクンと悪かったらそれは「失語」だということです。E と V が同じくらいの数字だということには、今まで気がつきませんでした。また、「脳梗塞患者の収縮期血圧は 140 mmHg 以上が多く、低かったら違和感をもち大動脈解離 (右内頸動脈が障害されやすいので左麻痺になる) の可能性を考えよ」というのも、真のクリニカルパールです。

ほかにも、「急性脾炎」の項 (p.160~164) で紹介されている「高山の圧痛点」(剣状突起とへそを結ぶ中点から左側にある点を正中へ押した時の圧痛) や「Mallet-Guy 徴候」(右側臥位にして脾臓以外の臓器を右側腹部に移動させ、心窩部から左上腹部を触診して圧痛をみる) についても全く知りませんでした。「急性腎障害」の項 (p.190~193) では、尿管結石が尿管膀胱移行部にある時、カラードブラを膀胱越しに当てると「twinkle sign」が見られることが紹介されています。これは、ザラザラした物質の場合、石の後方が虹色に輝くというものです。今まで尿管結石では水腎症しか確認しておらず、結石にカラードブラを当てるなんて思いつきませんでした。また、カラードブラでは、「ureterovesical sign」(尿が尿管から膀胱に出てくるジェット) も確認できます。

実臨床で苦闘する著者たちだから共著が成功

本書には数多くの学びがあり、せっせと私の虎の巻に書き写しました。これで 1 つ賢くなったと余韻に浸っております。なぜ、本書にこんなに引きつけられたのだろうと考えてみました。

その理由は、まずその切り口ににあります。1 つの疾患を網羅的・教科書的に解説するのではなく、実臨床でありがちな陥りやすい“悪手”の例をあげ、そして“好手”を解説しています。自分が今まで行ってきた“悪手”を振り返り、悔い改めることができました。

著者の多くが、救急診療や総合診療に従事されている先生方で、実臨床に悩みもがきながら会得されたコツを披露してくださっています。いろいろな人に話を聞いてみるものだとつくづく思いました。また、独断に陥ることなく、さまざまな RCT (randomized control trial) からその根拠が示されています。

デカルトが「大勢の著者の共著による本は、単者の本よりもたいてい劣る」と言いましたが、本書は共著が成功した好例です。

G